

【論 文】

実在論の変容

——アリストテレスからホワイトヘッドへ——

齋藤 暢人

0. はじめに

ホワイトヘッドの過程の形而上学 process metaphysics がほとんど当時の哲学的流行の趨勢に逆らうかのような体系性を備えて二十世紀に登場した思想的事実は真に驚くべきものであり、それが現代の古典としての地位を確立してゆく一方で、改訂的形而上学 revisionary metaphysics の代表格として神聖不可侵の地位に祭り上げられたのも宜なる哉である。しかしながら、そうした評価は果たして妥当なものだったのかということになると、ここに一考の余地があるのではないか。

ホワイトヘッド自身の数理物理学者としての関心が色濃く反映した、相対性理論にインスパイアされたその時空論は未だに命脈を保っているのかもしれない。時間論において時折なされる彼への言及はその推測を裏付ける。だが、ホワイトヘッド形而上学は、たしかに科学哲学的側面をもつものの、純粹に哲学的関心からひとつの存在論的体系としてみたとき、すでに革新的な要素を含んでいるのではないか。現代科学との整合性という外的な要因に拠らずして、ホワイトヘッド形而上学の独自性を語ることは可能なのではないであろうか。

以下でみるように、形而上学の本性に関するこのいささか素朴な疑問には、ホワイトヘッド形而上学をアリストテレス形而上学と比較することによって答えられる。ホワイトヘッド研究という文脈の中で生み出されたアリ

ストテレスとホワイトヘッドの関係についての優れた論考の存在に気付くとき、ひとはホワイトヘッド研究の意義を再認識するだけでなく、現代における形而上学のひとつの可能性をすら望見するであろう。本稿では、アリストテレスとホワイトヘッドの比較に関する先行研究をサーヴェイしつつ、ホワイトヘッド哲学の現代的意義について若干の考察を試みる。

議論は次のように進む。まず準備として、アリストテレスにおける現実態と可能態の区別と質料形相説の関係について述べる (1)。次いで、ホワイトヘッドにおける現実態と可能態の区別について、アリストテレスとの違いに留意しつつ、要点を指摘する (2)。両者の比較に基づき、ホワイトヘッドにおける質料概念の解体 (3)、現実態と可能態の能動性と受動性による新たな特徴づけ (4)、現実態と可能態の原子性と連続性によるさらに別の特徴づけ (5) について論じ、その結果としての実在論の変容について論じる (6)。また、この変容からある存在論的カテゴリが要請されることを指摘し (7)、最後に形而上学の可能性を展望する。

1. アリストテレスの存在論： 質料と形相、可能態と現実態

難解を以て知られるホワイトヘッド形而上学の特徴を掴むためには、西洋形而上学の正統たるアリストテレス形而上学との比較検討は他の何にもまして適切な方法である。幸いなことに、このテーマについては、レクラーク、ローティ、フェッツらによる優れた研究がこれまで蓄積されている。これら先行研究の成果を利用しつつ、まずアリストテレス形而上学の基本的な枠組みを確認しておきたい。アリストテレスは『形而上学』において、超越的実在論と評される師プラトンのイデア論を修正し、いわゆる内在的実在論を提示した。その説の含意をここで論じ尽くすことはもとより不可能であるが、ホワイトヘッド形而上学との比較検討という当座の目的にとっては、質料、形相 (型式)、可能態、現実態という四つの基本概念について簡単にみておくことで十分である。というのも、すでに論者にはよく知られているよう

に、アリストテレスとホワイトヘッドの両者は、ともに現実態と可能態の区別をきわめて重視しており、したがってこの一対の概念は、彼らが共有する概念であり、共通の主題でもあるからであるⁱ。

『形而上学』の中枢部分（Z、H、Θ巻）において展開される実体についての考察のなかでは、まず、実体が質料と形相からなるという、いわゆる質料形相説が主張されたのち、これらの概念対が、現実態と可能態というもう一組の概念対によって解明されるⁱⁱ。議論は微妙な論点を多々含むが、おおまかにみれば、現実態・可能態の両概念は明らかなものとして前提され、実体とは何かを明らかにするための解明項として用いられる。分析の結果、質料は可能態であり（1042a27）、無規定なものとされ（1029a20）、その一方で、可能態のなかに差別相をもちこむ原因である種差、型式あるいは形相は現実態であるとされる（1042b10）。形相が現実態であるのは、それが質料より多く存在するからであり（1029a5）、したがって実体それ自体が現実態なのであり（1042b10）、本質や形相は現実態に属するのである（1043b1）。

以上はきわめて雑駁なアリストテレス形而上学のまとめであるが、ここからは少なくとも以下のようなことを読み取ることができる。それは、形相＝現実態、質料＝可能態と要約できるような、アリストテレス形而上学の基本性格である。これは以下のような表にまとめられるであろう。

【表1 アリストテレスの形而上学】

	現実態	可能態
形相	○	×
質料	×	○

アリストテレスにとって形而上学とは、存在であるかぎりでの存在についての学であり（1026a31-32）、端的にあるものとして定義される実体についての学である（1028a30-31）。上述のまとめからしても、質料形相説および現実態・可能態概念は、この実体について説明するための手段になっている

ことがわかる。すると、実体を措定するという立場、すなわち実体主義と、これらの分析工具とは相互に切り離しえない関係にあるように思われる。むしろ、ことによると、実体という概念は、質料形相説と現実態・可能態概念にもとづく形而上学から必然的に産み落とされたものだ、ということがありうるのではないか。のちにみるように、このような実体をホワイトヘッドは措定しないが、しかしその一方で、彼は現実態と可能態という、アリストテレスと共通する形而上学的概念を採用するのである。彼らの形而上学は当然異なっているが、そうであるとすれば、その差異の原因が、現実態と可能態という共通概念のとらえ方の相違に由来するということもありうるであろう。アリストテレスとホワイトヘッドのあいだにある、この形而上学的様相概念をめぐる距離、ないしずれの正体とはいったい何であろうか。

考察がやや先走ったようである。次に、ホワイトヘッドの形而上学の概要をみてみよう。

2. ホワイトヘッドの存在論： 可能態・現実態の再定義

ホワイトヘッドの過程の形而上学 *process metaphysics* における基礎的なカテゴリは、全く対照的な性格をもつとされる現実存在性 *actual entity* と永遠客體 *eternal object* の二者である (*PR* 18f., 44)。前者は時間的原子としての出来事であり、後者は性質、関係などの非時間的存在である。前者は存在せず、生成するだけであり、後者は時間を貫いて存在する対象 *object* であるが、実在的ではない。

一見したところ、これらはそれぞれ、アリストテレス以来、整備され体系化されてきた伝統的形而上学における個別者 *particulars* と普遍者 *universals* であるかのようなのである。そうであるとすれば、後者はアリストテレス形而上学における形相に相当し、それに対比される前者は、それを受け容れる質料にあたることになるであろう。

しかし真実は全く異なる。諸家が一致して述べるように、ホワイトヘッド

形而上学は、アリストテレス形而上学を逆にしたものになっているⁱⁱⁱ。その最大のポイントは以下である。すなわち、アリストテレスにおいては、形相と質料がそれぞれ現実態と可能態であったのが、ホワイトヘッドにおいては、形相に相当する永遠客体は可能態であるとされ、それと対比される現実存在性が文字通り現実態となる。

ホワイトヘッド形而上学においては、形相・質料というアリストテレスに特有の存在論的概念はもとより用いられないが、現実態と可能態の区別は採用されている。重要なのは、その中身がアリストテレスのものとはまったく入れ替わっている、ということである。アリストテレスにおいて現実的なものはイデア的なものすなわち超時間的なものである形相であった。しかし、ホワイトヘッドにおいて現実的なものはあくまでも時間的なものであり、イデア的なものではありえない。すると、ホワイトヘッドにおいて現実的なものにあたるのは、なによりもまず現実存在性を措いてほかにはないであろう。だが、アリストテレスの立場からみれば、これは質料的なもの、少なくとも非形相的なもの、とせねばならないであろう。

また、アリストテレスにおいて可能的なものは形相を受け容れる質料であった。質料は最終的には規定不可能なものであるが、少なくともイデア的なものではない。しかし、ホワイトヘッドにあっては、この形相に対応するものは永遠客体であって、現実存在性の対極に位置づけられ、可能態である、とされるのである。

こうしたホワイトヘッド形而上学の特徴をまとめるならば、次のような表が得られるであろう。先の表との比較から、両者の形而上学はまるで陽画と陰画のようにあざやかなコントラストをなすことがわかる。

【表2 ホワイトヘッドの形而上学】

	現実態	可能態
形相的なもの	×	○
質料的なもの	○	×

ホワイトヘッドによるアリストテレス形而上学のこうした修正は、いわば現実態の非形相化である。これは形相の非現実態化、あるいは可能態化と言い換えることもできよう。しかし既に述べたように、ホワイトヘッドはそもそも質料形相説を採らないのであった。ゆえにここで示した特徴づけは必ずしも完全に適切なものではない。つまり、ホワイトヘッドによる修正は、アリストテレスによって定められた概念同士の結びつきの相手を交換するということ以上のことを惹き起こしているようにみえる。それは、現実的なものとはなにか、可能的なものとはなにかという、基礎的概念の内容の再考を促すような、根本的な問題提起を含んでいるのではない。

とりわけ問題なのは、質料がホワイトヘッドの体系の中でどのようなものに変貌したのか、である。アリストテレスの形相に相当するものは、全く同一視できるわけではないにせよ、永遠客体としてホワイトヘッドの体系の一角を占めている。しかし、質料にあたるものには居場所が用意されていない^{iv}。他方で、現実態に相当する現実的なものは、たしかに非形相的なものではあるが、しかしこれは、アリストテレスの意味で質料的なものではないのである。

では、アリストテレスにおいて質料と呼ばれていたものはまったく消滅したのであろうか。ホワイトヘッドの体系における可能態の概念を検討してみると、この問いへの答えらしきものを見つけることができるが、同時にそれは、これらの形而上学的概念の意味内容を再考する機縁ともなる。質料概念のたどった命運について考察を続けてみよう。

3. 質料の解体

ここでアリストテレスの与えた規定をもう一度確かめてみると、質料には少なくとも二つの意味があったことがわかる。質料とは、ひとつには形相によって限定されるべき無規定なものであったが、もうひとつには、形相による限定を受け容れる受動的なものでもあった。アリストテレスにおいて質料概念に同居していたこの二側面は、ホワイトヘッドでは明確に区別されて

切り離され、その結果、それぞれに大きな変容を遂げてしまうように思われる。無規定なものは創造性 *creativity* という、通常の存在論ではみかけない特異なカテゴリとなり、他方で、受動的なものは引き続き可能態とされはするものの、ホワイトヘッド形而上学独自の文脈の中で複数の機能を担われ、さらに細分化されてゆくのである。

3. 1. 創造性

ホワイトヘッドは、創造性とはアリストテレスの質料のことである、という (*PR* 31)。アリストテレスの質料がそれ自体の性格をもたないのと同様、創造性は自分自身の性格をもたず、性格づけられることもできない (*ibid.*)。現実存在性の土台にある最高の普遍性である (*ibid.*)。

しかし、それは受動的なものではなく、受容性をもたない (*ibid.*)。現実世界の客体的不滅性によって制約される (*ibid.*)、すなわち過去の与件によって制約される能動性である。

したがって、創造性は能動性以外に指摘しうる特徴がなく、いわば純粋な作用であることがわかる。そうしたものを質料と呼んでよいのかは微妙なところであろう。創造性の措定を以て、ホワイトヘッドは質料にあたるものを放棄したと判断する論者もいる^v。しかし、そうではなく、質料に新たな解釈が与えられ、それによって新しい存在論の体系が提示されたとみることもできるのではないか。

というのも、創造性が定義上無規定なものであったとしても、前後の事情から、そこには一定の性格づけが可能であるように思われるからである。つまり、創造性は、無規定なものであっても非時間的なものではありえない。それは新規性 *novelty* をもたらす原理であり、現実存在性を生み出す原因である (*PR* 21)。そうである以上、その作用は時間のなかになければならない。

ともあれ、ホワイトヘッドによる質料の再規定は、質料の一部に能動性を認めるという、きわめて重要な洞察を含んでいるのである。

3. 2. 実在的可能態

ホワイトヘッドによれば、可能態には少なくとも二種類があり、それらの区別が必要である (PR 65)。アリストテレスのいう形相に最も近く、それゆえ典型的にイデア的なものである永遠客體は、非時間的なものは可能態であるというホワイトヘッドの立場にしたがうと、可能態に算え入れられる。これをホワイトヘッドは純粹可能態 pure potentialities (あるいは普遍的可能態 universal potentialities) という (ibid.)。

しかし、そのようなあからさまに形而上学的な対象のみが可能態であるわけではない。ホワイトヘッドが可能態として認めるもうひとつのカテゴリは、やはり時間との関連性が問われるという点がとりわけ興味深いものである。それは、現実存在性にとっての所与となったもの、つまり過去の現実存在性である。これをホワイトヘッドは実在的可能態 real potentialities という (ibid.)。

この実在的可能態の概念からは、ホワイトヘッドが現代物理学の成果を積極的に取り入れようとする姿勢が鮮明に認められる。存在の根拠は、ニュートンの古典力学によっては説明できないし、ましてそれ以前のアリストテレス的自然学によっては当然説明できない。現実存在性は相互関係のなかにあって他から切り離すことはできないのであるが、このことは以下のように説明される。

現実世界は現実存在性に相対的に定まるものであり、いわば指標的 indexical である (ibid.)^{vi}。また、同一の現実世界をもつ異なる現実存在性は存在しないので、現実存在性の個体化の原理でもある (PR 22f.)。つまり、現実存在性は現実世界によって制約されているのであるが、見方を変えれば、これは各現実存在性が現実世界を介して他の現実存在性と関わりあうという相対性原理であり、物理学における相対性理論からの形而上学的要請なのである (ibid.)。実在的可能態はすでに消滅した現実存在性であるが、客体的不滅性のカテゴリにより、これらはそれを与件とする後継の現実存在性

のなかに存在している (PR 29)。

したがって、実在的可能態の概念によって、ホワイトヘッドにおける具体的・個別的なものとしての現実存在性は、錯綜する諸関係の重量のなかにおかれることになり、いわゆる実体のイメージとはかけ離れた姿を呈してくることになる。これは明らかにホワイトヘッドのいわゆる反実体主義の徴候であるが、のちに他の形而上学的主張との相互関連のなかで改めて検討することとしよう。

4. 能動性と受動性

ホワイトヘッド形而上学の要点をこのように整理してみると、過程の形而上学における可能態と現実態の区別は、もうひとつの概念対と関係するよう思われてくる。それは、能動性と受動性の区別である。ある現実存在性について、それが当の現実存在性それ自体であるのか、それとも、他の現実存在性にとっての与件であるのかは、そのありかたに関する決定的な違いである。前者であれば現実存在性は主体性をもっているが、後者であればそうではない。他の与件、すなわち客体となっているとき、それはもはや主体性を失っているのである。

この区別が現実存在性の時間性に関わるものであることに留意すべきである。現実存在性が主体性をもっているということは、それが現在あるということであり、主体性を喪失しているということは、それが過去のものとなっているということを意味している。

現実態と可能態の区別を、この能動性と受動性の区別という異なる区別と関連づけることができるのだとすると、これまで仮にホワイトヘッドにおける形相的なもの、質料的なものと呼んできたものを再定義できるようになる。曰く言い難いものだったものをいまや適切に名指すことができるのであり、先の表は次のように書き換えられるであろう。

【表3 ホワイトヘッドの形而上学 改】

	現実態	可能態
受動的なもの (形相的なもの)	×	○
能動的なもの (質料的なもの)	○	×

さて、この言い換えないし修正は何を意味するのか。いまや質料形相説が放棄されたのであるから、現実態と可能態の概念もまた以前とは異なるものとなっているはずである。具体的には、修正によって他の概念と結びつく可能性が開かれたという点が大きな違いなのではないか。言うまでもないが、こうした修正を可能とする概念は行きあたりばったりというわけにはゆかない。能動と受動の概念は、ホワイトヘッドによって改めて形而上学の根本概念として、实在性の規準として選択されたのであり、それは何らかの形而上学的直観に基づいている。そこには幾許かの妥当性、正統性を認めることができるであろう。

この修正が基本概念の意味内容の変更を伴う以上、その形而上学体系への影響が明らかにされねばならない。本節において検討したように、ホワイトヘッドにおいては、現実態や可能態に属するものが複数存在しており、したがって基本概念の再定式化は必ずしも自明ではない帰結をもちうるのである。これまでの議論の要点を再確認しておけば、それは次のような事情であった。

【表4 カテゴリーの多様化】

現実態	可能態
現実存在性 創造性	永遠客体 与件 延長連続体

ここからわかることがいくつかある。現実存在性のもつ現実という性格は、創造性という異質なカテゴリとの共通性によって理解することができ、それは能動性というここで新たに導入されたカテゴリによって説明可能である。また、永遠客体の可能態という性格は、与件や連続体などとの共通性によって理解することができ、それはやはり受動性によって特徴づけることができるのである。ホワイトヘッド形而上学における現実的なもの、可能的なものは、当然のことながらアリストテレス形而上学のなかでの現実態、可能態の意味では理解することができない。能動性と受動性というカテゴリはこの問題への答えなのである。

しかし、このような分析が可能であるということは、ホワイトヘッド形而上学のなかで現実態と可能態にさらに異なる概念が結びつくことの可能性を示唆するように思われる。さしあたりその最有力候補は、原子性と連続性の区別である。ホワイトヘッドにとってこれらの概念は数理哲学の研究対象であり、彼はほぼ生涯をかけてこれらの概念の分析を追究したとみることができる。彼は基本的には可能的無限の立場を採っており、連続体は現実には存在しないものとみなすのであるが、では、このような無限論、連続論を内包するような形而上学的体系とはどのようなものなのであろうか。

5. 原子性と連続性

質料形相説を採るアリストテレスにおいては、形相は現実態であり、個体が成立するためには不可欠なものであったが、しかし、実体が個性によって分析される、ということはなかった。他方で、個性に対比されるべき無規定性は質料すなわち可能態の特徴であるとされるが、しかし、これは被解明項であって、解明項ではなかった。したがって、質料が無規定性によって分析されるということもやはりなかった。それゆえ、個性が暗示する原子性や無規定性が前提としている連続性が基本的な存在論的カテゴリとして措定されることはなかった。

しかし、ホワイトヘッドにとってこれらの概念は重要な基礎的概念であっ

たように思われる。個性性とはつまるところ分割不可能なものにあてはまる原子性であり、無規定性の一面ともいえる可分性としての連続性と、その概念的内容において鋭く対立する。『過程と実在』における延長連続体 extensive continuum に関する議論をみると、そこでホワイトヘッドは、現実態と可能態との区別を、原子性と連続性の区別によって説明しようと試みているようにみえるのである。

われわれの知覚を典型とする日常的世界の様態、すなわち表象の直接性 presentational immediacy においては、同時的世界は延長連続体として現れる (PR 61) (この世界はいわば現象学的世界である)。そして、ここにおいて可能性と現実性の取り違えの誤謬が生じる (ibid.)。

現実性とは、現実存在性が構成する実在の世界のことであるが、現実存在性は徹底的に原子的であり、そこには連続的なものはない (ibid.)。現実世界は創造性を限定し、また、そればかりでなく、永遠客体からの普遍的可能性をも限定するのである (ibid.)。しかし、この世界は精確に瞬間的であり、それゆえいわゆる直観的な持続を特徴とする日常的な経験の世界とのあいだには必然的にずれが生じてくることになる。そのようないわば即自的世界を覆い隠すかのように展開する同時的な世界は、それゆえ連続的であって (ibid.)、いわば対自的世界である。そこには同時性が分割のための可能態として張られているのである。

このように分析することによって、取り違えがなぜ生じるのかはもはや明らかとなったと言えよう。根本的には、表象の直接性においては、同時的なものは因果的に独立である、という (物理学的) 事実が無視されるからである (ibid.)。そのような因果的独立性が知覚不能である以上、取り違えはやむを得ないとすら言える。同時的世界は、表象的客体化において分割可能な延長になるのである (ibid.)。

ホワイトヘッドにおける連続性と原子性の区別は、先の能動性と受動性の区別と同様に、その時間論に淵源するということが容易に読み取ることができよう。連続性が現れるのは現在においてであるが、過程の形而上学におい

てこの「現在」は多義的である。連続的な現在は過去を含む現在であるが、原子的な現在は純粹な現在、つまりその周囲から因果的に独立な現在である。このずれを考慮すると、ホワイトヘッドにおける可能態が過去とのかかわりを含意するということが体系全体の整合性のために必要不可欠であることは明らかであろう。それゆえ可能態は連続性という性格をもたねばならなかったのである。

かくして、ホワイトヘッドの形而上学においては、現実態と可能態の差異が、原子性と連続性の差異としてもとらえなおされることになる。典型的な現実態である現実存在性にとっては原子性がその必要条件であり、その現実世界を構成する与件などは、それと対比される形で連続的なものとなる。

もちろん、ホワイトヘッドにあっては、現実態＝原子的、可能態＝連続的というように、これらの概念が完全に重なるわけではない。事柄はそれほど単純ではない。まず、可能的であっても原子的なものがある。永遠客体はそれぞれが固有の性格をもっていて、いわば個体化されている (PR 48)。また、現実態でありながら連続的なものもある。それは創造性である。ホワイトヘッドはデカルトの時間論、連続的生成説を、ゼノンのパラドックスを招きうる根本的原因として否定する。ホワイトヘッドが認めるのはむしろ連続性の創造である (PR 35)。それゆえ、創造性はそれ自体が連続的であろう。ただし、ここでの連続性が直ちに空間的延長性を意味しないことには注意しなければならない。

したがって、原子性と連続性という概念は、それぞれが現実態と可能態に単純に対応するのではなく、むしろそれらと交差することによって、その中に含まれる諸概念をさらに精密に規定する役割を果たしていると言ったほうが、より実情に即した説明であるかもしれない。

しかしながら、たとえそうであったとしても、原子性と連続性は、現実態と可能態のなかにそれぞれの典型を見出すことができ、そのかぎりでは現実態と可能態を特徴づけるのである。現実存在性の生成は、それ自体による自己差異化として理解されうるものであり、また、そのような原初的な運

動はさまざまな可能態をその背景とする。現実態は可能態の決断なのである (PR 43)。この一種の図と地の関係によって原子性は能動性に、連続性は受動性にそれぞれ結びついている。

6. 実在論の変容

以上みてきたように、ホワイトヘッドの過程の形而上学は、アリストテレス形而上学の大幅な修正になっている。アリストテレスにおける形相=現実態、質料=可能態という対応が崩れ、形相は可能態となった。質料は、その一部が現実態となったが (創造性)、他方で可能態となったものもある (実在的可能態)。かくして、このカテゴリは解体された。その結果、現実態と可能態の差異を生ぜしめる要因として、能動性と受動性の差異、原子性と連続性の差異という異なる原理がもちこまれた。

しかしながら、このような大幅な修正を受けたにもかかわらず、ホワイトヘッドの形而上学は依然としてアリストテレスの形而上学との一致点を失ってはいない。両者はどちらも実在論であり、現実的なものを超えた何ものかを措定する立場をとっている。すると、ここでわれわれは次のような問いを立てることができるであろう。ホワイトヘッドによるアリストテレス形而上学の修正は、形而上学をどのように変えたのであろうか。教科書的な理解によれば、ホワイトヘッドはアリストテレスの実体にもとづく形而上学、実体主義を否定し、反実体主義をとったということになっている。それはその通りであろうが、ではその射程、意義はいかなるものなのか。

アリストテレスにとっての形而上学とは実体の解明であり、したがって実体を措定することはその理論の前提である。だが、ホワイトヘッドは、無規定で受動的なものを排除しようとする。無規定で受動的なものは、アリストテレスにおける基体とみることができる (PR 21, 30)。これは、変化の前夜を通じて同一性を保つべき実体の候補のひとつである。それゆえ、これの否定はほぼ自動的に実体の排除を意味する。

ホワイトヘッドは、実体を「空虚な現実性」と呼び、主体的直接性のない

ものとみなしている (PR 29)。これは有機体の哲学では受け容れられない。実在的可能態のところでは触れたような相対性原理に反するからである。実体は「質の実体への内属」という図式から生じるのであり、これは表象の直接性の分析が不十分であることから生じる事態である (ibid.)。現実の存在は不変の主体ではない。むしろ、主体であるばかりではなく、さらに他の与件としての超体 *superject* でもある (ibid.)。

実体は「差異化されない持続」としてもイメージしうる (PR 77)。しかしこれは、現実存在性のありかたではなく、表象の直接性において知覚される結合体のありかたであって (ibid.)、これを科学にまで拡張するのは誤謬である。しかし実際にはこれまで連続的素材が仮定されてきた。また、あるものがより基本的な物質に分析されると、その次には、その「より基本的な物質」が実体とされる、ということを繰り返してきた。そのような分析は支持できない (ibid.)。また、永続する実体は、生活上有用であるが、事物の本性に関する根本的な主張にはならない (PR 79)。これを措定する限り、現実のものは変化せず、性質・関係からできあがっている、ということになる (ibid.)。しかしこれは受け容れられないのである。

こうしたところから、ホワイトヘッドがアリストテレスの実体主義を否定し、反実体主義をとったこと、また、一般的にアリストテレスにその起源を帰せられるいわゆる実体・属性図式の妥当性を否認したということはたしかである。だがそうすると、いまやホワイトヘッドのみる世界は、実体や属性以外のものから構成されていなければならないことになるであろう。そのための材料として残されているのはもはや関係だけであり、したがって世界はいわば関係から編み上げられていることになる。ここで論理的には、関係が唯一の実体を構成するという一元論も可能であるが、変化は現実的存在の社会で起こる、という多元論も可能であり、ホワイトヘッドが選択するのは後者である (ibid.)。

また、実体の否定や実体・属性図式の放棄は、次のことを示唆するであろう。つまり、普遍者と個別者の区別の不可能性である。というのも、この区

別は何らかのかたちで実体概念に訴えることによってのみ可能だからである。

ホワイトヘッドによれば、普遍者と個別者は、永遠客体と現実存在性と無関係ではないが、一致しない (*PR* 48)。存在論的原理と相対性原理により、普遍者と個別者は区別できない (*ibid.*)。伝統的な定義では、普遍者は多くのものに述語づけられ、他方で、個別者は述語づけられるが、それ自体は述語とならないものであるとされる。しかし、そうした分析は誤りである (*ibid.*)。現実存在性は普遍者では特徴づけられない (*ibid.*)。現実存在性は他の現実存在性と関係する。普遍者は他のものとは異なるものであるという点で個別的でもあり、個別者は他の個別者に関係するから普遍者でもある (*ibid.*)。

形而上学的観点からの存在の分析は、普遍者と個別者の関係に注目することとでなされる。アリストテレスは両者のあいだに述定の関係を見出したわけである。それに対して、ここでのホワイトヘッドの主張は、アリストテレスの関係の拡張ないし一般化である。実在は個別者と普遍者のあいだの関係によって構成されていたのであるが、存在論的原理と相対性原理によって、いまや個別者のあいだに形而上学的な関係が認められるのである。より詳しくは、存在論的原理によれば、事物の根拠は現実存在性にあるのであり (*PR* 18f)、いかなるものも何らかの現実存在性のなかにある (*PR* 46)。また、相対性原理によって、個別者としての現実存在性は実在的可能態としての個別者をその内部に取り込むことになる。

これまでの議論を振り返ると、このような反実体主義は、変化の根底に何かを措定しようとするわれわれの形而上学に関する原始的直観、否むしる形而上学的本能の不合理的を告発することからの必然的帰結であることがわかる。この議論の論拠が先に述べた質料概念の解体であることはもはや明らかであろう。アリストテレスにおいて措定された無規定で受動的なものを分析することによって、ホワイトヘッドの形而上学は反実体主義を主張するところまで達したのである。実在論の枠組みにとどまりながらも、このよう

な変容の可能性があるということを示しえたという点において、ホワイトヘッドの形而上学はたしかにアリストテレスの形而上学の一般化になっている。

かくして、形而上学に関する概念枠組みの変化は多くの意想外の帰結をもたらすであろうが、ここでは次のことに注目したい。現実態に相当する存在者としての現実存在性について、ホワイトヘッドは、現実存在性は内的関係があるから、変化しない、と述べている (*PR* 58f.)。この主張はどのように理解することができるであろうか。これはとても簡潔な主張ではあるが、きわめて深い意味を湛えているようにも見える。その含意を測るためには十分な分析が必要である。

しかし、これまでの考察を踏まえるならば、われわれはここでのホワイトヘッドの主張を次のように解明し、理解することができるであろう。これはある存在者と他の存在者との関係について述べたものであり、両者の関係は内的関係であるとされている。ここからは、関係の種類あるいは性質と持続との関係に関するある独特な見解を看取することができる。つまりここには、存在者はもはや持続しないから、他の存在者とのあいだに外的な関係を結ぶことはできない、という考えが表明されているようにも思われるのである。関係が外的であるとは、その関係項が相互に偶然的に関係するということであろう。このことを、ホワイトヘッドは、それら諸項がそれぞれ変化すること、すなわち持続することを含意する、とみているのではないであろうか。このような見立ての下であれば、無規定なものが排除されたとき、存在者のあいだに成立可能なものとして残される関係は、内的なものしかなくなるであろう。

したがって、このような推量にいささかでも妥当性が認められるならば、ホワイトヘッドの反実体主義からは内的関係説が帰結する、ということになる。ここから容易に想像がつくように、ホワイトヘッドの形而上学的主張は、それぞれが孤立したものではないのである。彼自身が描き出す宇宙の姿を反映するかのよう、個々の主張は有機的な連関のなかにあると言えよう。

かくして、現実存在性の生成消滅は、他の現実存在性とのあいだに結ばれた内的関係と表裏一体のものとなる。これは、次のような意味において興味深い。つまり、生成という場面は、いわゆる実体的変化であり、何が起きているのかを言表するのは極めて難しい。にもかかわらず、ホワイトヘッドはまさにそこに照準を合わせているようにみえるのである。生成は双極的な過程である (PR 45)。すなわちそこには現実世界の決定性と永遠客体の非決定性が関わるのであり、ある現実世界の所与が新しい現実性に吸収されるとき、そこに永遠客体が流入する (ibid.)。ホワイトヘッドは、これを、現実存在性の形相的構成は不決定から決定への推移であり、客体的構成はその最終決定である、ともいう (ibid.)。これらは、現実存在性において生じる同一の事態をいわばその外部と内部からみた表現であろう。外からみれば推移だが、中からみれば決定であるという二重性のなかに、瞬間に凝縮された関係の姿が記述されている。

だが、もうしそうであるとする、ここからさらにある重要な帰結を引き出すことができるように思われる。生成消滅する現実存在性を措定するということは、それらを構成するさまざまな関係の措定を伴うであろう。その関係とはどのようなものなのであろうか。存在者のあいだに成立してそれらを結びつけると同時に存在者を構成するような関係であるそれらは、内的関係のための存在論的カテゴリ、关系的個別者 relational particulars などではないか。ホワイトヘッドの形而上学はこのようなカテゴリを必然的に措定することになるのであろうか。

7. 关系的個別者

ホワイトヘッドの存在論が关系的個別者のカテゴリを含むということは、すでに一部の論者によって指摘されているが^{vii}、これはそもそも分析的形而上学において論じられるものであるから、まずそれがいかなるものであるのかを概説しておこう。

关系的個別者とは、抽象的個別者、いわゆるトロープの一種である。しか

し、トロープの典型が特定の色、形、匂いなどの個別的性質（個別的な単項的属性）であるとされるのに対して、關係的個別者は個別的な關係（個別的な多項的属性）である。

トロープを擁護する論者は大抵において普遍者は不要であると考えてるので、おおむね唯名論者であるが、必ずそうであるとは限らない。普遍者を要請しつつ、それでは不足であるということからトロープをも要請する實在論者の立場も可能である。また、トロープを認める者のなかでも、いかなる種類のトロープを認めるのかで諸説ある。ある者はトロープを性質に限定すべきであり、關係的個別者は個別的性質に還元される、と考える^{viii}。しかし、そのような還元が不可能であるとされることもある。

こうした分析的形而上学において発達した論点を踏まえつつホワイトヘッドの形而上学を見直してみると、それは、普遍者に相当する永遠客体を含むがゆえに實在論であるが、さらに、以下で見るように、多種多様な個別的な關係をも認めるので、關係的個別者をも許容する、多くの存在論的カテゴリを措定する体系であると判断される。

ホワイトヘッドは、具体的にはどのような關係的個別者を論じているのであろうか。『過程と實在』導入部のカテゴリ論をみてみよう。まず、現實存在性は個別的であるが、他のものに関わりつつこれを直接構成する關係である包握 *prehension* もまた個別的であり、それゆえ關係的個別者である。

また、現實存在性から持続する実体状にみえるものを社会として構成することが可能であり、そうした社会は結合体 *nexus* と呼ばれるが、これはもちろん個別的である。さらに、現實的存在者の内部でそれを構成するさまざまな主体的形式 *subjective form* は、現實存在性を構成する要素のひとつとして個別的である。また、現實態としての結合体と純粹可能態としての永遠客体から構成される命題 *proposition* は、非純粹可能態 *impure potentiality* として個別的である。これらはいずれも単純なものではない。というのも、これらはみな事実であって、もはや「もの」ではなく「こと」だからである。結合体は公的事実 *public fact*、主体的形式は私的事実 *private fact*、命

題は可能的事実 possible fact なのであり、そのなかに複数の項を擁するものであり、したがって関係である。以上から、これらはいずれも関係の個別者の変種であると言うことができる。

前節で確認したように、ホワイトヘッドは反実体主義をとり、普遍者と個別者のあいだの境界が不鮮明となることを許容するのであるが、このような事態に立ち至るのは、個別者のあいだの内的関係があることによるのであった。相対性原理と存在論的原理がここで利いてくる。まず相対性原理により、あらゆるものが包握によって内的に関係づけられるのであるが、この関係は相互内在という、外的な関係としては理解不能な構造を作り出すのであり、そこで生じた絡み合いはまさに有機体を形成することになる。また、存在論的原理によって、内的関係の項のうち、少なくともひとつは現実存在性であるか、それを構成するものでなければならない。これら二つの諸原理にしたがって、ホワイトヘッドにおける基本的な存在論的カテゴリの多くは関係的なものとなり、かつ現実的なものとして個別的なものなのである。

かくしてホワイトヘッドの形而上学は多種多様な関係の個別者のカテゴリからなることが明らかとなったが、ここで個別者の概念についてひとつ注意しておこう。

前節の議論を想起すると、ここでわれわれが示したのは、内的関係説から関係的個別者の存在が帰結する、ということである。だが、この「関係的個別者」という名称にはいささか注意が必要である。というのも、ここに含まれる「個別者」をアリストテレスの意味で理解するわけにはゆかないからである。それはもはや実体ではないし、実体を典型とするものでもない。ここでの「個別者」はむしろホワイトヘッドの意味での個別者になっている。それは、それ自体が関係でもあるかもしれないが、他方で相互に関係しあうものなのであり、それぞれのなかに含まれることが可能なものなのである。

だが、虚心に考えてみれば、関係的個別者というものは、そもそもそのようなもの（ホワイトヘッドの意味での個別者）なのではないであろうか。分析的形而上学者の脳裏には次のような考えが過るであろう。実体はいわゆる

属性に分析することができるかもしれない。だが属性とは何か。その候補には普遍者とトロープがある。だが、個別的な単項的属性への還元は困難である。そこで、関係の個別者をも認めるならば実体の形而上学的分析は可能なのではないか。

このような思考過程を経て、実体を構成する基本的な形而上学的要素たることを期待されて思い描かれた関係の個別者は、もはやホワイトヘッドの立てた諸カテゴリと大差ないものとなっているのではないか。

関係の個別者についての議論は未だに十分とは言い難いが、ホワイトヘッドの形而上学の再検討はそうした未開拓の領域に足を踏み入れるときのひとつの手がかりになりそうである。

8. おわりに

アリストテレス形而上学の主題は実体、質料であった。これらの探究を通じて存在を解明しようとしたが、いずれについても完全な分析には到達しえなかったように思われる。このこれ、個物としての実体は定義できないし、また、究極の質料は無規定のままである。

ホワイトヘッドの過程の形而上学は、アリストテレスの形而上学を一般化し、同時にその難点を解消しようとするひとつの試みであったと解釈することができる。現実態と可能態を定義し直すことにより、ホワイトヘッドは形而上学の代替的体系を提出した。それがアリストテレスの形而上学を本当に包摂するものになりえているかどうかの評価は慎重であるべきであろうが、その思索のなかに注目に値するものが含まれていることはたしかであろう。本稿では、それらの考察を総括する観点として関係の存在論からの視点が重要であることが指摘できた。このことは、ホワイトヘッドが活動した世紀転換期における観念論と實在論の関係を考えるうえでも、ひとつの手がかりとなりうるであろう。『過程と實在』の副題は「コスモロジーの試論 An Essay in Cosmology」であるが、これは「関係の形而上学の試論 An Essay in Relational Metaphysics」でもよかったのかもしれない。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 20K00015 の助成を受けたものである。

〔注〕

- ⁱ Rorty (1983: 79f.)
ⁱⁱ アリストテレスについての簡にして要を得たまとめが Leclerc (1961) にある。
ⁱⁱⁱ Leclerc (1961: 178ff.), Rorty (1983: 80f.), Fetz (1981: 223-6)
^{iv} Leclerc (1961: *ibid.*)
^v Leclerc (1961: 178f.)
^{vi} Rorty (1983: 82)
^{vii} Lango (2003)
^{viii} Lango (2003). 関係的個別者の擁護については次を見よ。Bacon (1995), Mertz (1996)

文 献

- Aristotle, 1957, *Metaphysica*, Oxford: Oxford U. P. (岩崎訳『形而上学』講談社)
 Bacon, J., 1995, *Universals and Property Instances: The Alphabet of Being*, Oxford: Basil Brackwell
 Fetz, R. L., 1981, *Whitehead: Prozeßdenken und Substanzmetaphysik*, Freiburg/München: Alber
 Lango, J. W., 2003, 'Relational Particulars and Whitehead's Metaphysics', in G. W. Shields (ed.), *Process and Analysis*, Albany: SUNY Press, 119-137
 Leclerc, I., 1961, 'Form and Actuality', in I. Leclerc (ed.), *The Relevance of Whitehead*, London: George Allen & Unwin (reprint 2013, London: Routledge), 169-189
 Mertz, D. W., 1996, *Moderate Realism and Its Logic*, New Haven/London: Yale U. P.
 Rorty, R., 1983 (1963), 'Matter and Event', in Ford, L. S., & G. L. Kline (eds.), *Explorations in Whitehead's Philosophy*, New York: Fordham U. P., 68-103
 Whitehead, A. N., 1969 (1929), *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, New York: Free Press (平林訳『過程と実在 1・2』みすず書房) (略号 PR)

Realism Transformed: From Aristotle to Whitehead

SAITO Nobuto

ABSTRACT

It is a truly astonishing scene of the history of thought that Whitehead's process metaphysics appeared as a metaphysical system that almost defied the trend of philosophical fashion in the twentieth century. Thus, it is less surprising that, while establishing its position as a classic, it failed to obtain deserve interests because of reputation of typical revisionary metaphysics. However, there should be more consideration about what ground this evaluation based on. From a purely philosophical point of view, does Whitehead's metaphysics not already contain some innovative elements? Is it not possible to talk about its uniqueness without relying on any extrapolation consistent with modern science? In this paper, with surveying previous comparative studies on Aristotle and Whitehead, I attempt to make some considerations about the contemporary significance of Whitehead's philosophy.

The discussion proceeds as follows. First, as a preparation, I will outline Aristotle's distinction between the actual and the potential (1). Next, I will summarize Whitehead's distinction between the potential and the actual, paying attention to the differences with Aristotle (2). Based on the comparison of both metaphysicians, we consider Whitehead's deconstruction of the concept of matter (3) and introduce a new characterization of the actual and the potential by activity and passivity (4), and another characterization by atomicity and continuity (5). We then scrutinize the importance of Whiteheadian transformation of Aristotelian realism (6) and point out that a certain ontological category is required from this transformation (7). Finally, we will give some consideration about the possibility of metaphysics.